

富田林市埋蔵文化財調査報告29

平成9年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

1998・3

富田林市教育委員会

はじめに

本書は平成9年度に実施しました国庫補助事業の発掘調査報告書です。

今回報告しますのは富田林市の南部域に広がる遺跡で、錦織遺跡と錦織南遺跡です。錦織遺跡は縄文時代前期、北白川下層式の縄文土器が採集されることで早くから注目されていましたが、その後の調査で古墳時代中期から後期にかけての埋没古墳や土壙墓が発見されたり、奈良時代から中世にかけての掘立柱建物が見つかるなど『日本書紀』に記載されている百濟郷との関係が注目される遺跡です。

錦織南遺跡は錦織遺跡より世に知られるのは遅ますが、滋賀里式土器に混じって大洞式の土器が出土するなど、縄文時代晩期のまとまった資料が出土することで注目されるようになりました。その後、奈良時代から中世にかけての掘立柱建物や井戸など集落のまとまりを示す遺構の発見があり、すぐ北に広がる錦織遺跡との関係が注目されています。

今回の調査では、集落の構造に迫れるような遺構には恵まれませんでしたが、錦織南遺跡に関しては奈良時代後半期のまとまった土器資料が出土しました。律令体制下の富田林を知る上では重要な資料になると思われます。

最後になりましたが、調査にご理解、ご協力いただきました関係各位にお礼を申し上げるとともに、今後とも文化財保護にご理解とご協力くださいますようにお願い申しあげます。

平成10年3月

富田林市教育委員会

教育長 清水富夫

例　　言

1. 本書は、富田林市教育委員会が平成9年度に、国庫および府費の補助をうけて実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は富田林市教育委員会文化財保護課、平方扶左子、田中正利を外業担当者に、栗田薰を内業担当者とし、平成9年4月1日に着手し、平成8年3月31日に終了した。
3. 本書で使用した方位と標高は、すべて磁北と東京湾標準潮位で表示した。
4. 遺物の縮尺は土器、瓦が1/4、鉄器が2/3である。
5. 本書の執筆は目次に記すものがあたった。なお、本書の編集は栗田が行った。
6. 本書の作成にあたって、遺構の実測は平方、田中、松本貴匡が、遺物の実測は栗田、楠木理恵、秋山敦子、松本が行った。製図は遺構を平方、瀬戸が、遺物を栗田が行った。
7. 出土遺物および各種記録類は富田林市埋蔵文化財センターで保管している。
8. 調査の実施および本書の作成にあたっては、下記の諸氏に協力を得た。ここに記して感謝します。

樋口吉文（堺市教育委員会）

山田幸広（藤井寺市教育委員会）

西山昌孝（千早赤阪村教育委員会）

阿南辰秀・伊藤慎二（阿南写真工房）

秋山敦子・岩井節子・岩瀬調子・河井容子・楠木理恵・瀬戸直子・

千歳ふみ・辻本千絵・前野美智子・松本貴匡・山本節子

（富田林市立埋蔵文化財センター）

本文目次

はじめに

例言

I 錦織遺跡

(NK 9 7)

1. 調査に至る経過(田中 正利).....	1
2. 調査の方法	2
3. 調査区の立地と基本層序	2
4. 遺構	2
5. 遺物	4
6. まとめ	4

(NK 9 7 - 1)

1. 調査に至る経過(平方扶左子).....	5
2. 調査区の立地と基本層序	5
3. 遺構	6
4. 遺物	6
5. まとめ	7

II 錦織南遺跡 (NKS 9 7)

1. 調査に至る経過(平 方).....	9
2. 調査区の立地と基本層序	10
3. 遺構	10
4. 遺物(栗田 薫).....	13
5. まとめ	27

調査抄録 28

図 版

挿図目次

図 1 錦織遺跡調査地位置図	1
図 2 NK 9 7 調査区位置図	2
図 3 NK 9 7 第1トレンチ平面図・断面図	3
図 4 NK 9 7 第2トレンチ平面図・断面図	4
図 5 NK 9 7 - 1 調査区位置図	5
図 6 NK 9 7 - 1 第1・第2トレンチ平面図・断面図	6

図7 NKS 97-1出土遺物	7
図8 錦織南遺跡調査地位置図	8
図9 NKS 97調査区位置図	9
図10 NKS 97遺構平面図	10
図11 NKS 97河道最下層地形図・断面図	11. 12
図12 NKS 97ピット4出土黒色土器・整地層出土須恵器	17
図13 NKS 97整地層出土土師器	19
図14 NKS 97整地層出土土師器	21
図15 NKS 97整地層出土土師器・製塙土器	23
図16 NKS 97整地層出土平瓦・鉄刀子・鉄釘	24

表 目 次

表1 NKS 97ピット一覧表	13
表2 NKS 97土器観察表（その1）	24
表3 NKS 97土器観察表（その2）	25
表4 NKS 97土器観察表（その3）	26

図 版 目 次

図版1 (上) NKS 97第1トレンチ上層全景 南西から (下) NKS 97第1トレンチ下層全景 南西から
図版2 (上) NKS 97第2トレンチ全景 南から (下) NKS 97第3トレンチ全景 東から
図版3 (上) NKS 97-1第1トレンチ 東から (下) NKS 97-1第2トレンチ 北から
図版4 (上) NKS 97全景 北から (下) NKS 97全景 南から
図版5 (上) NKS 97南側断面 北西から (下) NKS 97東側断面 北西から
図版6 (上) NKS 97上層遺構全景 西から (下) NKS 97上層遺構全景 北から
図版7 (上) NKS 97ピット4 西から (下) NKS 97西側断面第9層遺物出土状況 東から
図版8 NKS 97出土遺物

I 錦織遺跡

錦織遺跡は、富田林市の南部に広がる縄文時代から中世にかけての遺跡で、石川左岸の河岸段丘上に立地している（図1）。1950年頃から縄文土器が採集されていたが、1967年に縄文時代前期の北白川下層式の土器が出土したことでの名が知られるようになった。その後、大阪府教育委員会と富田林市教育委員会の調査で弥生時代の土墳墓、古墳時代の円筒埴輪棺、奈良時代から中世にかけての掘立柱建物などが検出された。特に1988年の富田林市教育委員会の調査で奈良時代の建物跡と塼、縄釉の円面鏡が出土していることから、日本書紀に記載されている百濟郷との関係、もしくは遺跡の南側にある錦織廃寺、西側にある細井廃寺との関係が注目されている。



図1 錦織遺跡発掘調査地位置図

N K 9 7

調査地：富田林市大字錦織 6 6 9-6

調査面積：1 0 m²

1. 調査に至る経過

平成 9 年 7 月 3 日に富田林市大字錦織 669-6 で個人住宅新築工事の届出があつた。協議の結果、浄化槽部分と建物部分、敷地の南側で調査を行うこととなり、平成 9 年 7 月 24 日から 7 月 30 日まで現地調査を行つた。

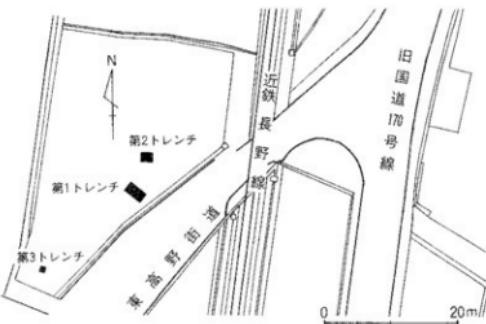


図 2 N K 9 7 調査区位置図

2. 調査の方法（図 2）

調査地内の計 3ヶ所にトレンチを設定し、人力掘削で調査を行つた。

第 1 トレンチは調査地の東側に $2.9m \times 1.6m$ 、第 2 トレンチは第 1 トレンチの北側に $2m \times 1.6m$ 、第 3 トレンチはトレンチの南西側に $1m \times 1m$ で設定した。

なお第 2、3 トレンチは遺構の広がりを確認するために設定しただけで、遺構の掘削は行わなかつた。

3. 調査地の立地と基本層序

調査地は錦織遺跡のほぼ中央部、石川左岸の河岸段丘上に位置し、近鉄長野線の西側に隣接している。調査前の状況は耕作地である。以上のことから、本来、南西から北東へ緩やかに傾斜していた地形にあわせて段状の水用が營まれていた状況が推測できる。

第 1 トレンチでは上から順に第 1 層（耕土）、第 2 層（床土）、第 3 層（灰色土）、第 4 層（黄褐色弱粘質土）、第 5 層（黄灰褐色弱粘質土）、第 6 層（褐灰色混砂弱粘質土）で、現況から $0.66m$ 下で地山となる。ただし、第 3 層は調査区の東端部分でのみ認められ、もともと西側に 1 段高い水田があったものが削平されたために東側の低い水田の耕土だけが残ったものと思われる。遺構は 2 面あり、第 6 層目に上層遺構が、地山面で下層遺構が検出された。

第 2 トレンチの層序は基本的に第 1 調査区と同じであるが、第 5 層はこの調査区では認められない。遺構はすべて地山面で検出された。

第 3 トレンチは耕土直下が地山となり、遺構は検出されていない。

4. 遺構

以下、トレンチごとに記述する。

第 1 トレンチ（図 3）

上層でピット 2ヶ所が、下層で溝 1条が検出された。

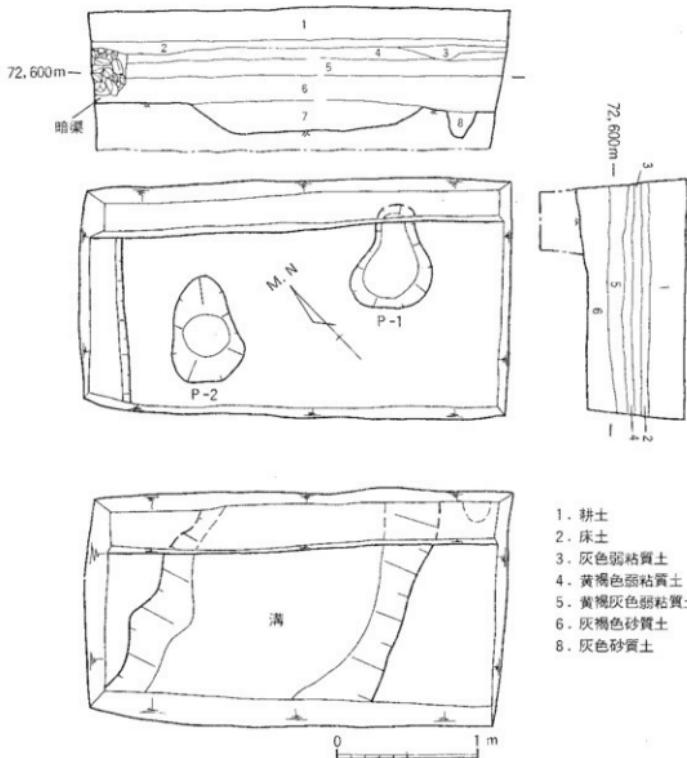


図3 NK 97 第1トレンチ平面図・断面図

上層遺構

ピット1

調査区の東側で検出された、南北0.62m以上、東西0.60m、深さ0.06mの不整形のピットである。埋土は褐灰色粘質土で、遺物は出土していない。

ピット2

調査区の西側で検出された、南北0.76m、東西0.54m、深さ0.33mの不整形のピットである。埋土は褐灰色粘質土で、土師器の小片が数点出土している。

下層遺構

溝

幅1.7m、深さ0.26mの南西から北東方向の溝である。底面はほとんど傾斜していない。埋土は灰褐色砂質土で、遺物は出土していない。

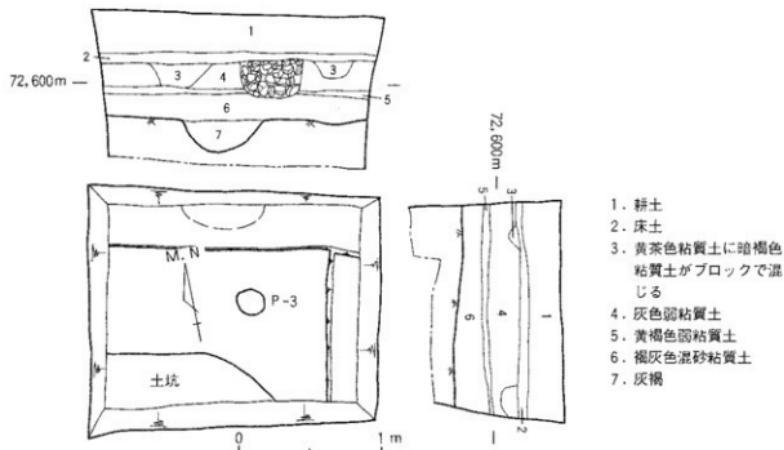


図4 NK97第2トレンチ平面図・断面図

第2トレンチ（図4）

土坑1ヶ所、ピット1ヶ所が検出された。

土 坑

調査区の南西隅で検出された、東西1.22m以上、南北0.40m以上の土坑である。遺構の掘削を行っていないので深さは分からず。埋土は灰茶色粘質土である。

ピット3

調査区のほぼ中央で検出された、南北0.20m、東西0.18mの円形のピットである。遺構の掘削を行っていないので深さは分からず。埋土は褐灰色粘質土である。

5. 出土遺物

調査区が狭いこともあり、遺物は少ない。

ピット2

土師器の小片が2点出土している。そのうちの1点は生駒西麓産の胎土である。

第5層

土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土している。いずれも小片である。

6.まとめ

本調査地では2面の遺構が確認された。上層で検出された第1トレンチのピットは、出土遺物から奈良時代のものと考えられる。下層遺構は遺物が出土していないため時期については不明である。

調査地の周辺では、調査地北側の1990年から1992年の調査と調査地西側の1983年の調査で奈良時代の掘立柱建物跡が確認されており、この一帯に奈良時代の集落が存在していたことが窺える。

N K 9 7 - 1

調査地：富田林市大字錦織 5 9 6 - 1

調査面積：4.0m²

1. 調査に至る経過（図5）

今回の調査は錦織遺跡の北端部を、個人住宅建設に先立って実施した。調査は浄化槽部分で行い、2本のトレンチを設定した。第1トレンチは調査地の西端部に東西1.0m、南北2.0mの規模で、第2トレンチは調査地の東端部に東西1.0m、南北2.0mの規模で設定した。

2. 調査区の基本層序

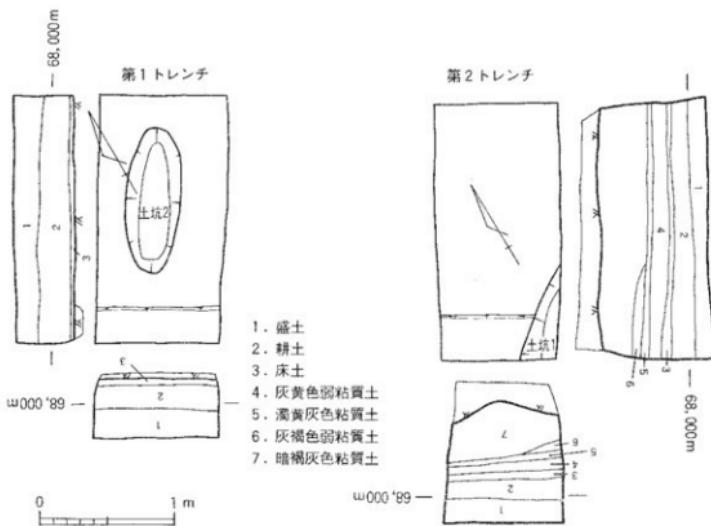
調査区の基本層序は第1トレンチでは、上から順に第1層（盛土）、第2層（耕土）、第3層（床土）が堆積し、それらを取り除くと地山面に達する。

第2トレンチは第1層（盛土）、第2層（耕土）、第3層（床土）、第4層（灰黄色弱粘質土）、第5層（濁黃灰色粘質土）、第6層（暗褐灰色粘質土）が堆積し、それらを取り除くと地山面に達する。

当該地の地形は西から東に向かって緩やかに傾斜していることから、本調査区の堆積状況も、西側で薄く、東側で厚い。



図5 N K 9 7 - 1 調査区位置図



3. 遺構 (図6・図版3)

第1トレンチで土坑1を地山面で検出した。規模は南北1.07m、東西0.4m、深さ0.12mを測る。埋土は濁褐灰色混疊粘質土である。

第2トレンチは第6層（暗褐灰色粘質土）を掘り込んだ土坑1を検出した。正確な規模は確認できないが、検出長南北0.70m、東西0.28m、深さ0.13mを測る。埋土は灰褐色弱粘質土である。地山面で遺構は検出されなかった。

4. 遺物 (図7)

今回の調査で出土した遺物には、土師器、須恵器、埴輪、黒色土器、瓦器が出土している。遺物はすべて第2トレンチから出土している。

土坑1

土坑1から土師器・瓦器が出土している。

土師器は小皿（1）がある。小皿は口径7.8cmを測る。器高は1.1cm、口縁部は外傾するタイプで、口縁部内外面は横なで、底部内外面はなでである。色調は内外面ともにぶい橙色で、胎土は精良である。

瓦器は、細片のため器種は不明である。

第5層

土師器・須恵器・黒色土器が出土している。

土師器には小皿（2）がある。口径7.6cm、器高1.35cmを測る。口縁部は外傾するタイプで、口縁部内外面は横なで、底部内外面はなでである。色調は外面ともにぶい橙色で、胎土は精良である。

須恵器には壺がある。

黒色土器は細片のため器種は不明である。

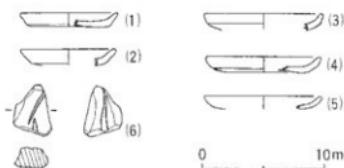


図7 NK97-1出土遺物

第4・3層

土師器・須恵器・埴輪・瓦器・焼土塊が出土している。

土師器は小皿（3～5）・壺がある。小皿（3）は口径9.7cmを測る。器高は1.35cm、口縁部はやや直立ぎみで、口縁部内外は横なで、底部内外面はなでである。色調はぶい橙色で、胎土は精良である。（4）は口径9.2cmを測る。器高は1.3cm、口縁部はやや直立ぎみで、口縁部内外は横なで、底部内外面はなでである。口縁部と底部境に沈線が1条めぐる。色調はぶい橙色で、胎土は精良である。（5）は口径9.5cmを測る。器高は1.1cm、口縁部は外傾するタイプで、口縁部内外・底部内外面は磨滅剥離による調整不明である。色調は橙色で、胎土は精良である。

須恵器は、細片のため器種は不明である。

埴輪（6）が1点ある。両面ともフラットで、ヘラによる線刻があることから蓋形埴輪の立ち飾り部の破片と思われる。

第2層

土師器・須恵器が出土している。ともに細片のため器種は不明である。

5.まとめ

今回の調査区は、1928年に消滅したと記録されている「川西古墳」の南東側にある。

川西古墳については、1989年に府営住宅の建て替えに伴う大阪府教育委員会の調査で、周濠と考えられる溝^(注1)が、1991年、1992年には市営住宅建て替えに伴う富田林市教育委員会の調査で、前述の周濠の続きと考えられる溝^(注2)が検出されていることから、外周溝をもつ帆立貝式もしくは造り出し付き円墳である可能性が高いことが確認されている。

第1トレーナーで川西古墳の周濠の一部を検出することを予想して調査を行ったが、周濠は検出されず、第5層目から蓋形埴輪と思われる埴輪片が1点出土したのみである。

(註) 1. 阿部幸一 (1989)『府営住宅双葉住宅に伴う甲田南遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会

2. 中辻亘・田川友美 (1994)『甲田南遺跡』富田林市

II 錦織南遺跡

錦織南遺跡は、市内の南部にあって、石川の左岸、近鉄長野線滝谷不動駅の南西に広がっている。その規模は、南北630m、東西470mに及び（図8）、富田林市教育委員会や大阪府教育委員会が実施した発掘調査によって、縄文時代から中世に至る複合遺跡であることが判明している。とりわけ旧国道170号線の東側では石川の旧河道が、西側では奈良時代から中世の掘立柱建物、井戸などの集落に関する遺構が検出されていることから、遺跡の中心が西側にあることも判明している。（註1）また1994年の調査では、西側でも河道が検出されるなど、旧地形の状況も含めて次第に内容が明らかになりつつある。（註2）

（註）1. 中辻亘・田川友美・栗田薰（1993）『錦織南遺跡』錦織南遺跡調査会

中辻亘・栗田薰（1994）『錦織南遺跡Ⅱ』錦織南遺跡調査会

2. 栗田薰・田川友美・今西淳・平方扶左子（1996）『平成7年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林市教育委員会



図8 錦織南遺跡発掘調査位置図

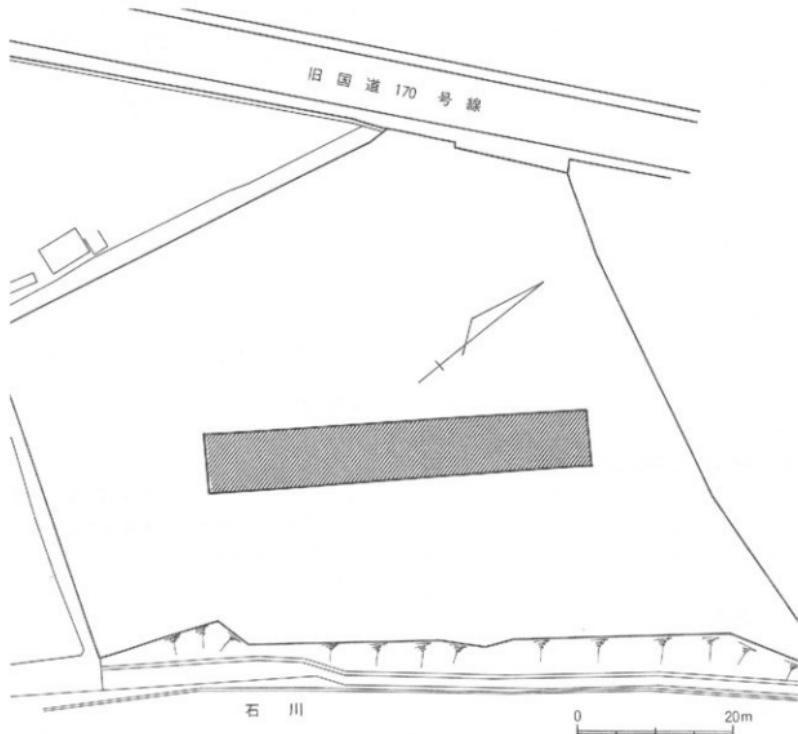


図9 NKS 97調査区位置図

NKS 97

調査地：富田林市大字錦織211-1

調査面積：350m²

1. 調査に至る経過（図9）

今回の調査は、1986年に大阪府教育委員会が行った旧国道170号線の歩道設置に伴う調査のP-32～34地点の東側でかつ、石川にはさまれた地区を特別養護老人ホーム建設に先立って実施した。

建物部分に6ヶ所のトレンチを設定し事前調査を行った。その結果、全てのトレンチから河道遺構が確認されたため、建物建設予定地に東西7m、南北50mの調査区を設定して調査を行った。なお、事前調査では一部地山面まで確認できなかったため、調査区の北側、中央、南側の3ヶ所にトレンチを入れ、機械掘削によって地山面を確認した。

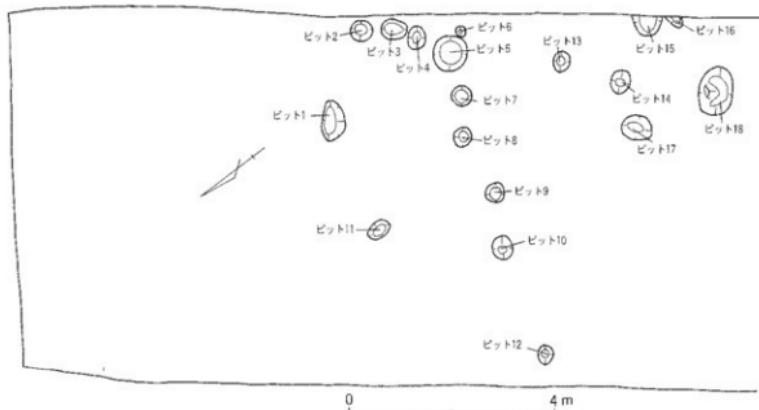


図10 NKS 97 遺構平面図

2. 調査区の基本層序 (図版5)

調査区の基本層序は、第1層（耕土）、第2層（床土）、第3層（灰黄色土）、第4層（黄灰色土）、第5層（灰褐色土）、第6層（濁黄灰色土）、第7層（灰黄褐色土）、第8層（濁黄灰色弱粘土質）、第9層（暗灰褐色土）が堆積している。第9層以下は、河道堆積が地山面までつづく。

3. 遺構 (図10・11)

河道とピット18ヶ所検出した。

河道 (図版4)

調査区全体が河道の中に入っているため、規模については確認できなかった。深さは、約2.5mを測る。堆積は27枚に分層できたが、大きく分けると3層に分かれる。1層目は粘質土層、2層目は砂層、3層目は混疊層である。

地山面は粘土層で、えぐられた箇所や段差がある。3層目の混疊層では約20cmから80cm大の円碟が堆積しており、流れの凄さを物語っている。

なお、図11は河道の最下層の地形図である。

ピット (図版6・7)

ピットはトレチの北側のみで2面検出している。

1面目は、暗灰褐色土層を掘り込んでいる。2面目は、暗灰褐色粘質土層を掘り込んでいる。1面目のピットは6ヶ所あり、そのうちピット4・ピット8・ピット10・ピット12は約2.2mの間隔で1列に並んでいる。

トレチ北から約7mの東壁付近でピット4を検出した。規模は東西0.44m、南北0.34mの楕円形を呈している。深さは約0.27mを測る。埋土は濁灰褐色砂質土で、底から黒色土器の椀が口縁部

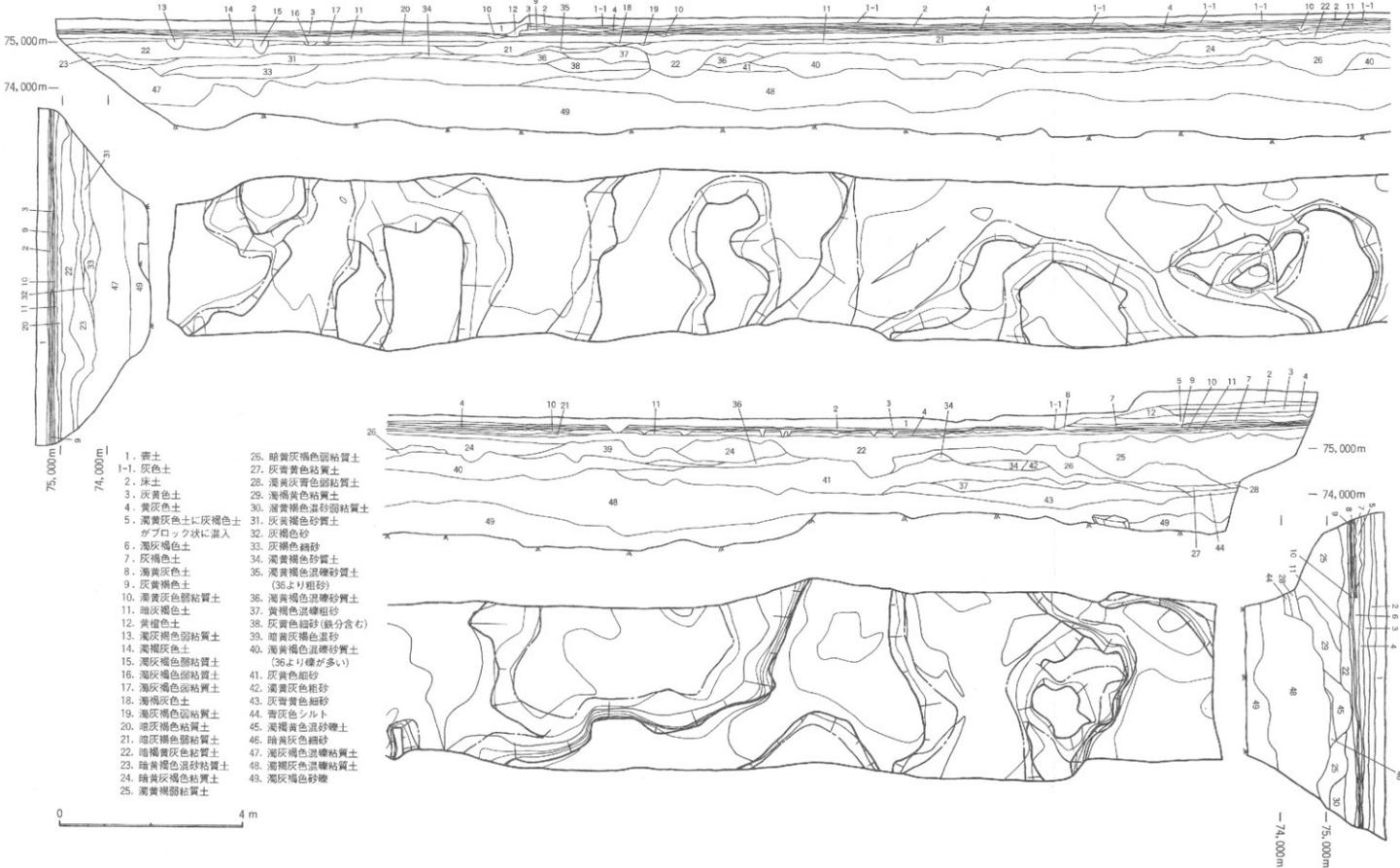


図11 NKS 97 河道最下層地形図・断面図

種別	形 状	規 模(m)	深さ(m)	土 色	遺 物
ピット1	楕円形	0.80×0.49	0.13	濁褐灰色土	土師器
ピット2	円 形	0.41×0.42	0.09	濁褐灰色土	
ピット3	楕円形	0.54×0.40	0.08	濁褐灰色土	土師器
ピット4	楕円形	0.44×0.34	0.27	濁灰褐色砂質土	黒色土器・土師器
ピット5	円 形	0.69×0.66	0.08	濁褐灰色土	土師器
ピット6	円 形	0.22×0.22	0.08	濁灰褐色弱粘質土	土師器
ピット7	円 形	0.40×0.40	0.07	濁褐灰色土	
ピット8	円 形	0.40×0.36	0.33	濁灰褐色砂質土	土師器
ピット9	円 形	0.39×0.39	0.31	濁灰褐色砂質土	土師器
ピット10	円 形	0.48×0.46	0.36	濁灰褐色砂質土	土師器
ピット11	楕円形	0.50×0.32	0.28	濁灰褐色砂質土	土師器・製塙土器
ピット12	円 形	0.38×0.32	0.27	濁灰褐色砂質土	土師器・黒色土器
ピット13	円 形	0.40×0.33	0.10	濁褐灰色土	土師器
ピット14	円 形	0.45×0.39	0.14	濁灰褐色弱粘質土	
ピット15	不整形	0.58×(0.40)	0.11	濁褐灰色土	土師器
ピット16	不整形	0.33×(0.21)	0.08	濁灰褐色弱粘質土	
ピット17	楕円形	0.61×0.50	0.17	暗褐灰色弱粘質土	
ピット18	隅丸方形	0.98×0.65	0.20	暗褐灰色弱粘質土	土師器・焼粘土塊
ピット19	—	—	0.30	濁灰褐色砂質土	土師器

表1 NKS97ピット一覧表

を下向きにして出土している。

なおピットの詳細は、表1を参照されたい。

4. 出土遺物

今回の調査では須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、製塙土器などの土器類と、埴輪、瓦、鉄器、サスカイトの剥片、用途不明の砂岩片や花崗岩片、焼粘土塊が遺物整理箱（内寸46.8cm×30cm×13.6cm）に合わせて約5箱分出土している。これらのうち瓦器を除く約4.5箱分が第9層目（暗灰褐色土）からの出土である。また、それらのうち約3.5箱分は奈良時代の土師器で、約1箱分が同時代の須恵器である。その他の遺物は合わせても1/3箱に満たない。これらのことから第9層目は奈良時代の整地層と認定できる。遺構からは土師器と黒色土器が出土しているが、すべてピットからの出土である。細片が多く、遺物箱1/4にも満たない。なお、瓦器は細片が3点出土しているが、第9層目の上層の旧耕土層からの出土である。また、調査区の下層部全体で検出された河道からは遺物がまったく出土していない。

以下、遺構出土のものを概説したあと、奈良時代の整地層出土のものを記述していくが、須恵器、土師器などの土器類から順に行う。埴輪、瓦、鉄器、サスカイト剥片については他の遺物として土器類のあとで記述する。

なお、土器類のうち図示したものについては観察表を載せているので、合わせて参照されたい。

遺構出土遺物

ピットは19カ所検出されているが、そのうち遺物が出土したのは13カ所である。すべて土器類であるが、その出土状況は表1で記したとおりである。ほとんどが細片で器種を判別できるものは少ない。わずかな痕跡からではあるが、それについて器種と所属時期をみていく。

ピット3

土師器が1点出土しているが、坏か皿の類である。胎土は精良で、明橙色の色調を呈する。内面に暗文が認められないことから8世紀中葉以降に比定できる。

ピット4（図版8、図12）

土師器が5点と黒色土器の椀（29）が1点出土している。

土師器は色調が明橙色系で、胎土の粗いものが4点とぶい黄橙色系で、胎土の精良なものが1点ある。前者は体部に指頭圧痕が明瞭に残ることから、椀もしくは甕の類の可能性が高く、後者は坏の可能性が高い。

黒色土器は完形品である。内外面とも黒色を呈す、いわゆる黒色土器B類である。

土師器の調整の粗雑さと、黒色土器の形態が瓦器椀に近いことから、これらの遺物の所属時期は9世紀以降に比定できる。

ピット5

土師器が1点出土している。色調はぶい橙色を呈し、外面に刷毛目が認められることから甕の可能性が高い。

ピット6

土師器が2点出土しているが、細片のため詳細は不明である。

ピット8

土師器が4点出土している。色調は2点が浅黄橙色、1点は暗茶褐色、残りの1点は明茶褐色を呈す。最後の1点は、生駒西麓産の胎土をもつことから羽釜の可能性が高い。

ピット9

土師器が4点出土している。色調はすべて明橙色系のものである。うち3点は器壁の厚さと湾曲具合からみて、坏、椀、皿の類である可能性が高い。あと1点は外面に刷毛目が明瞭に残る。

ピット10

土師器が2点出土している。色調は黄橙色のものが1点と明橙色のものが1点ある。前者は口縁部がわずかに外反して、端部が丸くおさまり、内面に沈線が1条めぐる坏である。内面は磨滅が著しく調整は不明であるが、外面は口縁部が横なで調整、体部に指頭圧痕が残り、調整が施されていない。これらのことから、この坏の所属時期は8世紀後半に比定できる。後者は器壁の厚さと、胎土の精良さからみて坏か皿の類と考えられる。

ピット11

土師器が5点、製塩土器が1点出土している。細片のため詳細は不明である。

ピット12

土師器が1点と黒色土器が1点出土している。土師器は外面に刷毛目が施されていることから甕の類と考えられる。黒色土器は内面だけが黒色を呈す、いわゆるA類である。黒色土器の存在から8世紀後半以降と比定できるだけである。

ピット13

土師器が7点出土している。色調は明橙色系のものが5点、ぶい黄橙色のものが2点ある。前者は胎土が精良なもの2点と極めて細かい砂粒の含まれるもの3点に分かれる。胎土の精良な2点は坏と考えられるものと、蓋の口縁部片がある。蓋の口縁部は端部がわずかに垂下する。細かい砂

粒を胎土に含むものの中には、ミニチュアの高坏の脚部が1点認められる。柱実の脚柱部で、面取りを11面行っている。にぶい黄橙色の色調のもののうち1点は高台の付された椀である。これらのことから土師器の所属時期は8世紀後半から9世紀にかけて比定できる。

ピット15

土師器が2点出土している。色調は黄橙色のものが1点とにぶい橙色のものが1点ある。後者は高台の付された椀である。高台付き椀からみて8世紀末から9世紀にかけてのものと比定できる。

ピット18

土師器が2点と焼粘土塊が出土している。土師器は色調が明橙色のもので、うち1点は高坏の脚部である。裾部に近い部分の破片であるため、脚柱部の面取りなどの状況は不明である。外面にヘラミガキが施されている。

焼粘土塊はスサいりで4点出土しているが、土質、スサの混入状況からみて、同時期に使用されていたものが分割したものと考えられる。

ピット19

土師器が2点出土している。ともに色調は明橙色を呈する。1点は口縁部が大きく外反し、端部が丸くおさまり、内面に沈線が1条めぐる坏、皿もしくは高坏の坏部の類と考えられる。あと1点は口縁部がわずかに外反する坏もしくは椀の類と考えられる。

整地層出土遺物（図版8、図12～16）

土器類

土師器、須恵器、黒色土器、製塙土器が出土している。須恵器から順にみていく。

須恵器（図版8、図12）

蓋、坏、皿、台付長頸壺、短頸壺、水瓶、平瓶、甕、台部がある。これらには6世紀代のものと8世紀代の2時期の遺物群が存在する。

蓋（1～9）

蓋はつまみをもたないもの（1,2）とつまみをもつもの（3～9）がある。前者は天井部と口縁部の境界は不明瞭で、器高は低い。全体に小型化してきているが、とりわけ（1）はそれが著しい。後者のつまみをもつものは（3）のようにつまみをもたない蓋と同じ形態をもちながら、つまみがつけられているものと、それよりは器高が低いが、まだ、ふくらみをもつ天井部につまみがつけられているもの（4～7）、扁平な天井部につまみがつけられたもの（8,9）がある。つまみは残存しているものを見る限りでは、扁平なつまみの中央部が窪んでいるもの（4）と扁平な宝珠つまみ（5）がある。（3）は壺用の蓋かもしれない。他は坏に伴う蓋である。所属時期は（1～3）が6世紀代に、（4～9）は8世紀代に比定できる。

坏（10～16）

坏は口縁部にたちあがりをもつもの（10,11）と、たちあがりをもたないもの（12～16）がある。前者は器高が低く、全体に扁平なもの（10）と底部に丸みをもつもの（11）がある。後者にはヘラ切り未調整のために底部に丸みが残っているもの（12）、平坦な底部から外傾してひらく口縁部を

もつもの（13～14）、それらの底部に高台がつけられたもの（15～16）がある。所属時期は（10、11）が6世紀代に、それ以外は8世紀代に比定できる。

台付長頸壺（17）

台部だけが残存している。裾部はふんばる形態をもち、脚柱部との境界に沈線が1条めぐる。6世紀代のものである。

短頸壺（18）

わずかに外湾する口縁部をもつ。肩部はおおきく張り出しが、全体の形状は不明である。

高坏（19）

脚部だけが出土している。大きく開く裾部に長方形の透かしがあけられている。6世紀代のものである。

水瓶（20）

頭部だけが出土している。8世紀代のものである。

壺（21, 22, 24）

長頸壺の体部である。底部に高台がつくもの（21, 22）と、つかないもの（24）がある。（24）は他の須恵器と比較して胎土に差があり、緻密で白っぽい。8世紀代のものである。

皿（23）

高台のつく皿である。8世紀代のものである。

平瓶（25）

完形品である。8世紀代のものである。

甕（26～28）

大きさは小型のものから大型のものまである。口縁部は外側へ丸く膨らむもの（26, 27）と平坦におさまるもの（28）がある。

土師器（図版8, 図13～15）

椀、鉢、坏、皿、高坏、壺、鍋、羽釜、竈、ミニチュアの鉢、ミニチュアの高坏、土錘が出土している。器種構成からみると椀、坏、甕が圧倒的に多い。すべて8世紀代のものである。

椀（30～35, 47）

高台のつかないもの（30～35）と高台のつくもの（47）がある。前者は口径11.5～15.7cmを測る。色調はにぶい橙色を呈するもの（30, 32）と明赤褐色系のものがある。形態は大きく3種に分かれる。すなわち、（30）のように平坦な底部から屈曲して立ちあがる口縁部をもつもの。（31～34）のようにほぼ平坦な底部から立ち上がって口縁部にいたるが、前述の（30）と比べると口縁部と底部の境界がそれほど明瞭に分かれないもの。（35）のように底部と口縁部の境界が不明瞭で丸底に近く、後述する鉢（35）の形態と類似するものがある。口縁部は横なで調整を施すことで最終形態を作っているが、約1.5cmの範囲を1回の横なで幅として2～3回行うことで、口縁部から底部にいたるまで横なで調整を行っているもの（30, 31）と、口縁部に1回横なでを施して、口縁端部を尖らせてることでわずかに内傾気味になっているもの（33）と、口縁部をつまみあげるようにして作り出している（34, 35）などがある。（30, 31）は体部も横なで調整を施して丁寧に製作しているが、他

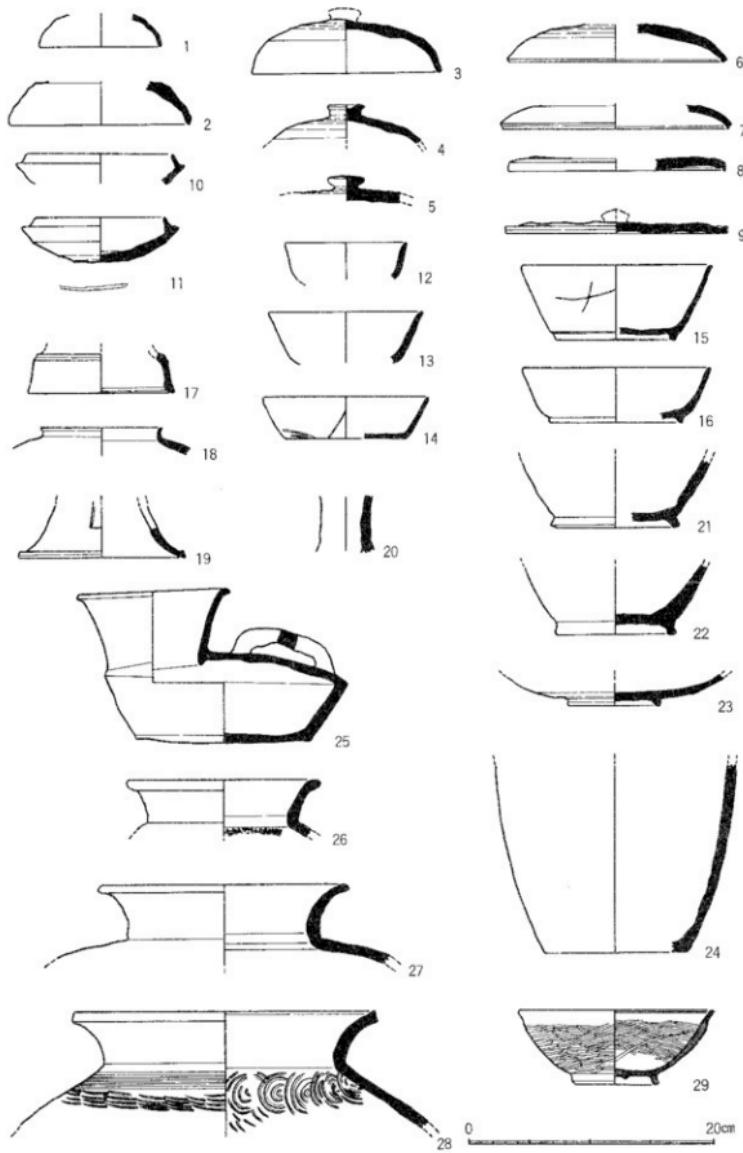


図12 NKS 97 ピット4 出土黒色土器、整地層出土須恵器

は体部に調整を施さず、指頭圧痕を明瞭に残す。

高台のつく椀（47）は前者に比べてその出土量は少ない。黒色土器椀や瓦器椀と類似する形態をもつ。

なお、椀に黒斑の認められるものはない。

鉢（36）

椀（35）を大型化したような鉢である。口縁部の作りだし方、体部の調整方法等が類似するだけでなく胎土、色調も酷似する。これと同種と考えられる鉢および椀は藤井寺市北岡遺跡（KT89-9）のSD01⁽⁴¹⁾で多量に出土している。

坏（37~40, 43~46）

高台のつかないもの（37~40, 43~45）と高台のつくもの（46）に分かれる。

前者は形態的には広い平坦な底部から斜め上方に外反して開く口縁部をもつもの（37, 44, 45）、ほぼ平坦な底部からなで調整を3回施すことによって、外傾する口縁部をもつもの（38）、わずかに丸みをもつ底部からなで調整を2回施すことによって、逆「く」の字状の口縁部をもつもの（39）、ほぼ平坦な底部から外傾して開く口縁部をもつもの（41, 42）、わずかに丸みをもつ底部から体部との境界にヘラ削りを施すことによって逆S字状に立ち上がらせる口縁部をもつもの（43）、底部と体部の境界が不明瞭で、椀に近い形態をもつもの（40）など様々な形態がある。

口縁部は（37, 38, 43~45）は丸く巻き込むが、（42）は端部で尖り気味に巻き込む。（39）は端部内面は斜めに平坦な面をもち、その中央に沈線が一条めぐる。（40, 41）は丸くおさまる。内面は暗文の施されているもの（43~46）と施されていないもの（37~42）があるが、（43, 45）は正放射状の暗文が一段と内底面に螺旋状の暗文が施されている。また、他は正放射状の暗文が一段施されている。ただし、暗文の施紋間隔は細かく密に施された（46）から極めて粗い間隔で施された（43）まで様々である。

高台のつくもの（46）は口縁部が欠失しているので全体の形状がわからないが、高台部は断面四角形で外側に張り出すように付されている。

なお、坏のうち（44）は黒斑が認められるが、他は黒斑が認められない。

皿（48）

（48）は平坦な底部から外傾して開く口縁部をもつ。底部と体部の境界は不明瞭である。口縁部は横なで調整を1回施すことによって、体部からさらに外反して開き、端部で丸く巻き込む。体部は調整が施されず、指頭圧痕が明瞭に残る。内面には正放射状の暗文が一段施されている。

なお、（48）の口縁部外面は黒斑が認められるが、図示できなかったものに黒斑の認められないものもある。

高坏（49~51）

坏部残存のもの（49）と脚部残存のもの（50, 51）がある。

坏部（49）はほぼ平坦な底部から大きく外反して開く体部と水平にのびる口縁部をもつ。口縁端部は丸く巻き込む。内面には正放射状の暗文が一段施されている。

脚部はともに短脚であるが、脚柱部の製作状況は（50）と（51）で異なる。（50）は脚基部から裾部にむかって、いったん中央部で細く絞りこむというように、円錐形の脚柱部から徐々に開いて裾部にいたるが、（51）は脚基部を最も細い部分にし、裾部に向かって開くというように、円筒状の

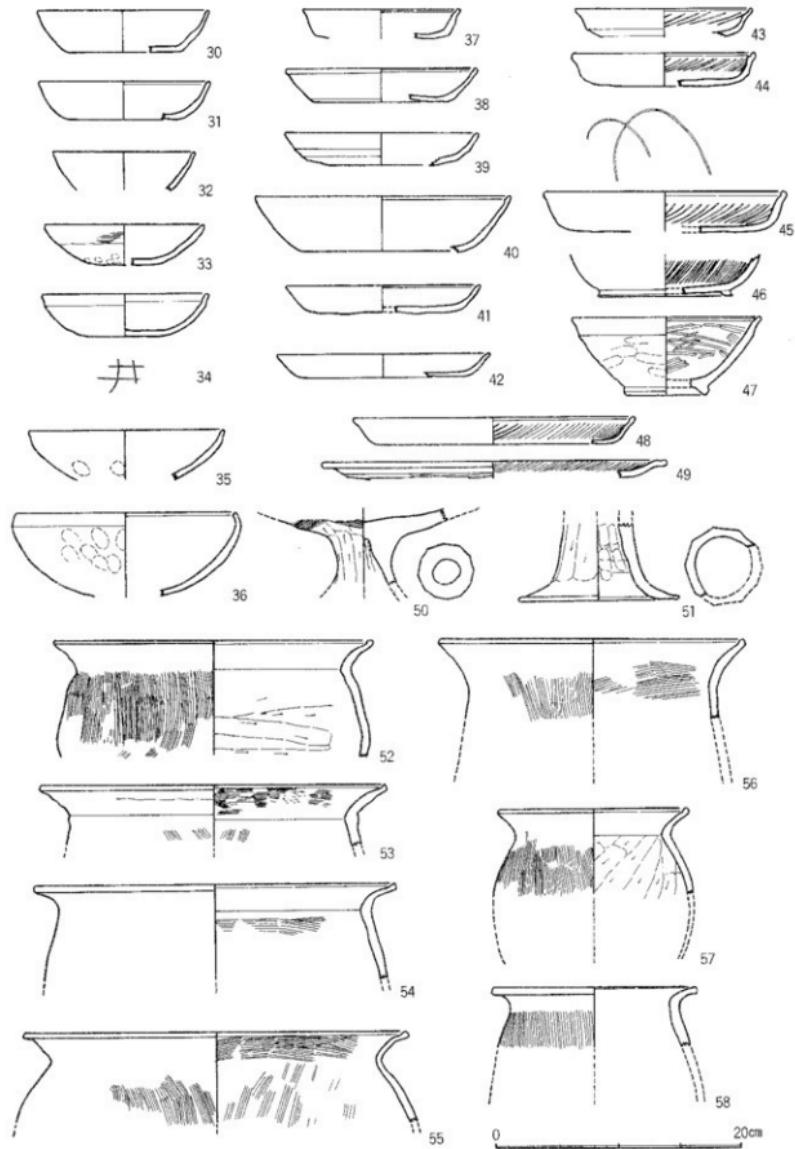


図13 NKS 97 整地層出土土器

脚柱部に、角度を変えて大きく広げる裾部をもち、裾端部で丸く巻き込む。坏部との接合は前者は円錐形の脚柱部の基部を芯にして、その回りに粘土を厚く巻き付け、坏部と接合するが、後者は脚柱部に粘土をほとんど充填せず、坏部と密着させる方法を取る。脚柱部外面はともにヘラ削りで面取りを行っているが、(50) は12面、(51) は10面である。

なお、図示できなかつたが、(49) と同じ形態で、同じ調整の施されている高坏の坏部片の中に口縁端部外面に一部、黒斑の認められるものがある。

甕 (52~72)

外面の調整によって大きく2種に分かれる。すなわち、刷毛目を施すもの (52~58) と調整を行なわず、指頭圧痕が明瞭に残るもの (59~72) である。なお、後者の中には鍋と分類した方がいいものが含まれるかもしれない。また、構成比率としては後者の方が圧倒的に多い。

前者には口径15~16cm程度の小型のもの (57, 58) と25~30cmを測る大型のもの (52~56) がある。小型のものは球形の体部をもち、「く」の字に外反する口縁部に丸く巻き込む口縁端部をもつ (57) と大きく屈折して開き、わずかに上下に拡張する口縁部をもつ (58) がある。大型のものはそれほど大きく張り出さない体部のものが多いが、球形に近い体部をもつ (55) も認められる。口縁部は体部と明瞭な境界をもつものが多いが、(56) のようになだらかに外傾して開くものもある。口縁端部は丸く巻き込むもの (52) のほか、つまみ上げるもの (53~56) がある。

後者には口径14~17cm程度の小型のもの (59~64)、18~22cm程度の中型のもの (66, 68, 70)、23cm以上を測る大型のもの (65, 67, 69, 71, 72) がある。大半が明赤褐色系の色調をもつ。この種の甕は前述の鉢 (36) および椀 (35) と同様に藤井寺市北岡遺跡 (KT89-9) のSD01⁽⁴¹⁾で多量に出土しているものと類似する。また、この種の甕の中には煤もしくは炭化物が付着して、確實に煮沸具として使用されているものも認められる。

鍋 (73)

舌状の把手のついたものがある。(73) の口縁部は外傾したのち、端部でわずかにつまみあげ、丸くおさめる。口縁端部外面には沈線が一条めぐる。体部は大きく張り出さない。把手は小ぶりで薄く、比較的上位に付されている。内面は口縁部、体部とも横方向の粗い刷毛目が施されている。外面は口縁部が横なで調整、体部は内面と同じ刷毛工具で縦方向に刷毛目が施されている。

なお、内面には炭化物がべつとり付着している。

羽釜 (74~83)

すべて生駒西麓窯の胎土をもつ長胴の羽釜である。ただし、(74) は他に比べて、より暗色で、チョコレート色に近い。他是すべて明茶褐色を呈している。口径は約21~34cmを測るものまであるが、30cm前後のものが多い。口縁部は外反して開き、口縁端部は丸くおさまるものが多いが、端部でわずかにつまみあげるもの (75) もある。鍔部はほぼ水平にのびる。鍔幅は2.5cm前後のものが多いが、2.1cmと幅の狭いもの (77) から、3.2cmと幅の広いもの (81) まで認められる。調整は口縁部内面が横方向の刷毛目もしくは横なで調整、外面は横なで調整が多い。体部は内面がなで調整、外面が縦方向の刷毛目もしくはなで調整が施されている。鍔部はすべて貼り付けであるが、なで調整で密着させている。

なお、口縁部内面に炭化物が付着しているもの (74, 81)、鍔部下面に一部、黒斑の認められるもの (80) がある。

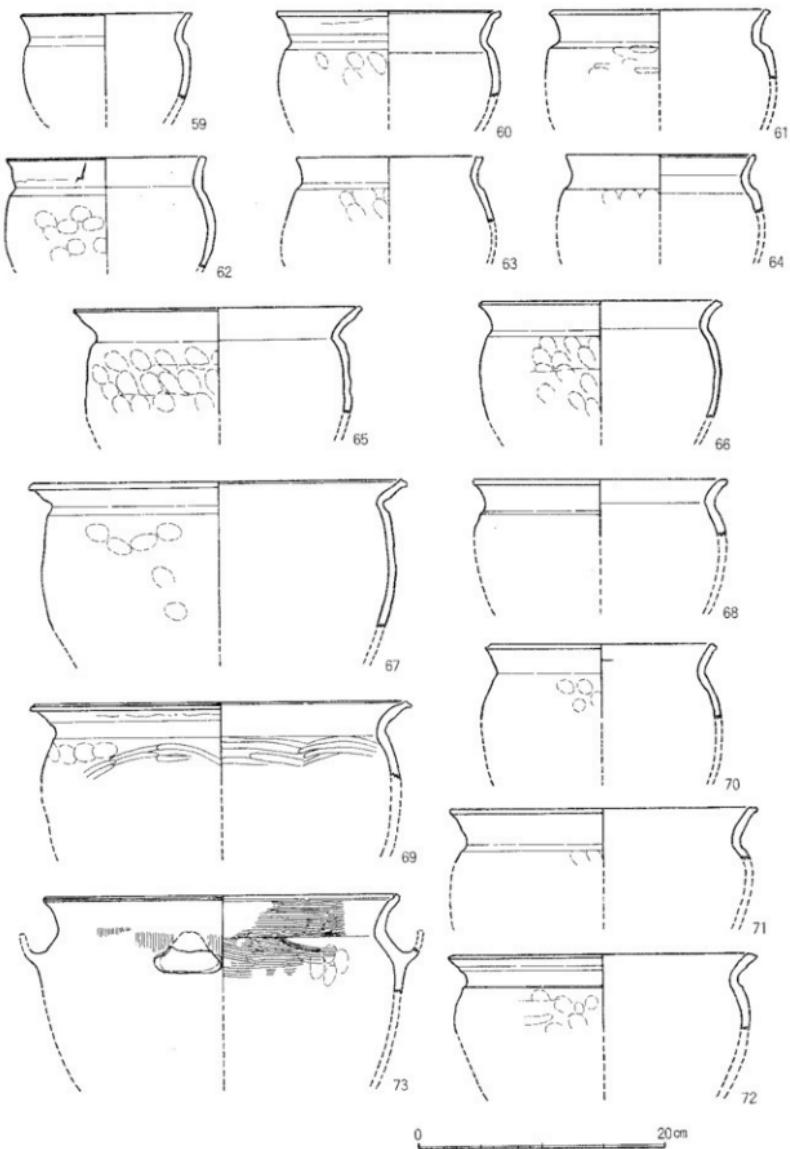


図14 NKS 9.7 整地層出土土師器

ミニチュアの鉢（84）

1点出土している。手づくねで、平底からゆるやかに開き氣味に内湾しながらたちあがる鉢である。

ミニチュアの高壺

脚基部が残存している。脚基部径は約2cmを測る。おそらく円錐形の脚柱部を芯にし、その回りに粘土を巻き付けて壺部と接合するタイプの高壺の小型品である。

土錘（85）

1点出土している。両端がすぼまる管状の土錘である。全体の約1/2が残存している。

甕（87）

確実に甕と認定できるのは1点だけである。焚き口と底の部分が残存しているだけである。焚き口は外面を刷毛目調整を施しているが、内面は一部で調整の認められるものの、大半は調整が施されず、指頭圧痕が開口部に斜行するように認められる。底の幅は広い部分で7cm程度で、裾部に向かってその幅はさらに狭まっている。また、底は粘土帯の貼り付けによって製作されているが、粘土を充填することによって接合しているというより、底部の粘土帯をなで延ばすことによって密着させている。

なお、この甕に二次焼成の痕跡はまったく認められない。

黒色土器

出土量は少なく、細片ばかりであるが、すべて内面に炭素の付着した破片で占められる。口縁部残存のものの中に小型の皿と推測できるものが1点あるが、他は破片の厚さからみて、椀と考えられるものと、約0.8cmという厚さから見て、椀より大型の器種と考えた方がよいものがある。

製塙土器（図版8、図15）

出土量は少ない。ほとんどが細片で全体形のわかるものは少ない。すべて白っぽい胎土に石粒が多く混入する胎土をもつ。また、すべて厚ぼったく、手づくねで製作されている。（86）は筒状の形態をもつが、他に最大径を口縁部にもつものもある。胎土、形態からみてすべて紀淡海峡産の可能性が高い。所属時期は8世紀代に比定できる。

その他の遺物（図16）

埴輪、瓦、鉄器、サスカイト剥片、用途不明の砂岩片や花崗岩片、焼粘土塊が出土している。しかし、その出土量は少ない。

埴輪

円筒埴輪が6点出土している。すべて破片であるが、小型の埴輪で硬質のものと軟質のものがある。無黒斑で、円形のスカシをもち、外面調整は継ハケ一時調整が施されているだけである。タガは横めて扁平な断面台形である。これらのことから出土した円筒埴輪の所属時期は6世紀前半に比定できる。

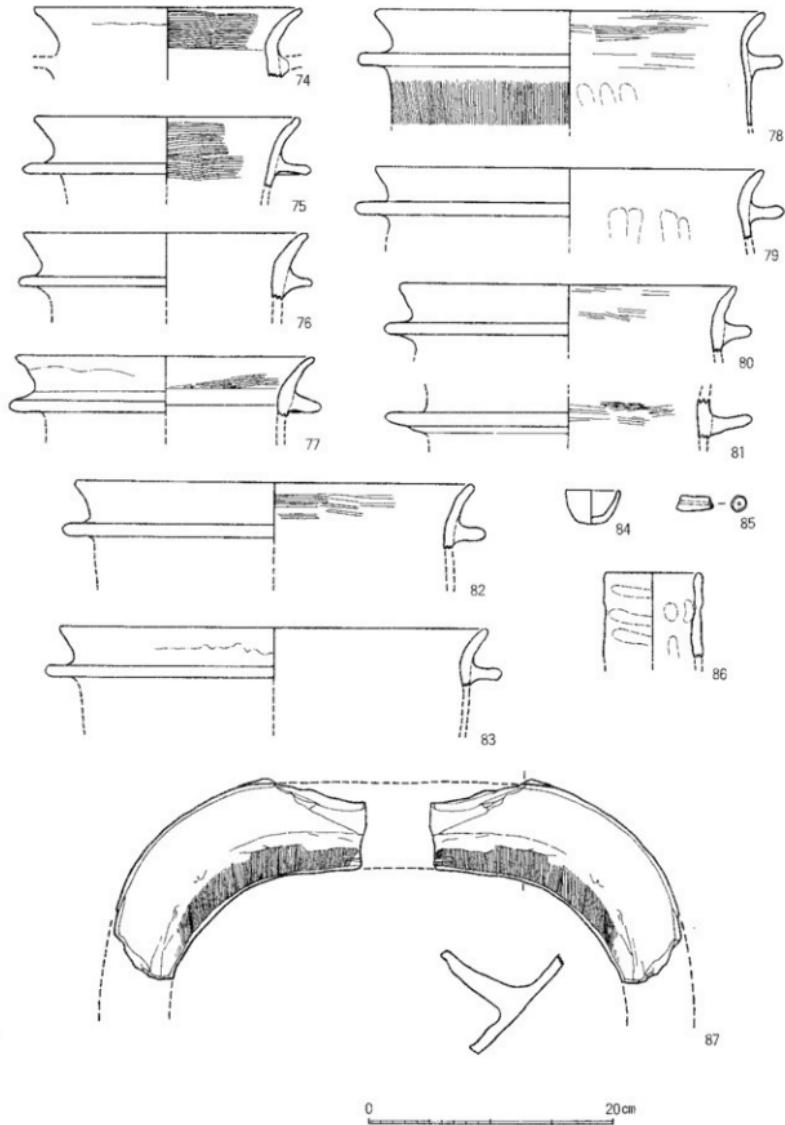


図15 NKS 97 整地層出土土器・製塙土器

瓦 (図16)

6点出土している。すべて平瓦である。図示したものの(1)は硬質で、灰色を呈すが、他は軟質で、橙色もしくは灰白色を呈する。すべて凸面が縄目タタキ調整、凹面は布日が認められる。

鉄器 (図16)

刀子が1点、釘が3点、鉄滓が2点出土している。

刀子(2)は残存長7.84cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmを測る。刃部のみ残存で、柄部刀の木質痕跡などまったく残っていなかった。

釘(3~5)はすべて断面四角形で、頭部付近が残存してるもの(3)と中央部残存のもの(4)、先端部残存のもの(5)がある。(3)は残存部位によるのかもしれないが、一辺約0.8cmをはかり、他に比較すると太い釘である。

サヌカイト剥片

2点出土している。2点とも単純最大長、単純最大幅が1cm以下の、打面がハジケとんだ微細剥片である。

用途不明の砂岩片と花崗岩片

砂岩片が4点、花崗岩片が2点出土している。ともに撒入石材といえるだけで、用途は不明である。

焼粘土塊

4点出土している。多量の石粒とスサが混入された焼粘土塊である。ピット18で確認している焼粘土塊と類似する。

(註1) 山田幸弘(1992)「II北岡遺跡の調査」「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅶ」所収、5~11頁

番号	河原 民族 種	土 谷 の 地 名	器物名	重量 (cm)	調 整	色 調	形 態 判 別	備 考
1 12	土 谷 の 地 名	福 士 谷 村	刀子	0.6 (2.7)	回転なし 刃部	灰 白 色	5%	鉄成: 良好
2 12	土 谷 の 地 名	福 士 谷 村	刀子	14.5 (3.5)	回転なし 刃部	深 棕 色	5%	鉄成: 不良
3 12	土 谷 の 地 名	福 士 谷 村	刀子	11.3 (4.4)	回転なし 刃部	青 灰 色	5%	鉄成: 良好, ろくろ: 右回り
4 12	土 谷 の 地 名	福 士 谷 村	刀子	13.0 (3.2)	回転なし 刃部	灰 白 色	5%	鉄成: 良好, ろくろ: 左回り
5 12	土 谷 の 地 名	福 士 谷 村	刀子	8.1 (2.2)	回転なし 刃部	灰 白 色	5%	鉄成: 良好, ろくろ: 右回り
6 12	土 谷 の 地 名	福 士 谷 村	刀子	12.0 (3.1)	回転なし 刃部	明 顯 灰 色	5%	鉄成: 良好, ろくろ: 左回り
7 12	土 谷 の 地 名	福 士 谷 村	刀子	11.9 (1.9)	回転なし 刃部	青 灰 色	5%	鉄成: 良好
8 12	土 谷 の 地 名	福 士 谷 村	刀子	12.5 (1.0)	回転なし 刃部	灰 青 色	5%	鉄成: 良好
9 12	土 谷 の 地 名	福 士 谷 村	刀子	12.2 (1.6)	回転なし 刃部	灰 白 色	5%	鉄成: 良好
10 12	土 谷 の 地 名	福 士 谷 村	刀子	11.8 たらあがり高 1.3 受持様 13.5 鉄成 2.3	回転なし 刃部	青 灰 色	5%	鉄成: 良好

表2 NKS 97 土器観察表 (その1)

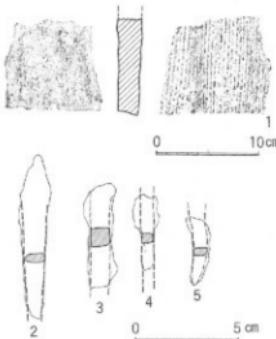


図16 NKS 97 整地層出土平瓦・
鉄刀子・鉄釘

番号	地図 区画	土 の 種 類	器種名	法長 (cm)	調 査 集 合	色 調 査 割 合	備 考
11	12	須 志 郡 年	口径 10.4 たんあらわし高 3.0 身幅 12.7 脚高 (3.2)	(内面) 回転なで、底部: 不定方向なでを付加 (外側) 成器、回転へら削り。その他: 回転なで 青灰色 5%			
12	12	須 志 郡 年	口径 9.8 身幅 (3.1)	(内面) 回転なで (外側) 回転なで 青灰色 5%			模様: 白斑、ふくら: 右側り
13	12	須 志 郡 年	口径 9.8 身幅 (4.4)	(外側) 回転なで 青灰色 5%			模様: 良好
14	12	須 志 郡 年	口径 13.4 身幅 3.5	(内面) 回転なで (外側) 回転なで 灰青色 5%			模様: 不良
15	12	須 志 郡 年	口径 15.3 身幅 6.8 身高 6.6 脚高 0.6 脚高 (6.2)	(外側) 回転なで 青灰色 5%			模様: 良好
16	12	須 志 郡 年	口径 15.2 身幅 10.8 身高 9.8 脚高 (4.6)	(内面) 回転なで (外側) 回転なで 青灰色 5%			模様: 良好
17	12	須 志 郡 古 付 舟	高脚鉢 13.0 舟形 3.3	(内面) 回転なで (外側) 回転なで (内面) 回転なで 灰白色 5%			模様: 良好
18	12	須 志 郡 舟	高脚鉢 9.7 舟形 0.8 舟高 (2.2)	(外側) 回転なで 灰白色 5%			模様: 良好
19	12	須 志 郡 舟 木 舟	高脚鉢 13.4 舟形 4.7 舟高 (4.7)	(内面) 回転なで (外側) 回転なで (内面) 回転なで 灰白色 5%			長方形の墨かしより、模様: 良好
20	12	須 志 郡 舟 木 舟	高脚鉢 10.8 舟形 0.9 舟高 (5.0)	(内面) 回転なで (外側) 回転なで (内面) 回転なで 灰白色 5%			模様: 良好
21	12	須 志 郡 舟	高脚鉢 9.7 舟形 0.9 舟高 (5.5)	(内面) 回転なで (外側) 回転なで (内面) 回転なで 灰白色 5%			模様: 良好
22	12	須 志 郡 舟	高脚鉢 10.8 舟形 0.9 舟高 (5.5)	(内面) 回転なで (外側) 回転なで 灰白色 5%			模様: 良好
23	12	須 志 郡 舟	高脚鉢 12.9 舟形 3.6 舟高 (4.8)	(内面) 回転なで (外側) 舟形部: 回転なで。その他: 回転へら削り 灰白色 5%			模様: 良好
24	12	須 志 郡 舟	口径 11.5 舟形 15.0	(内面) 回転なで (外側) 舟形部: 回転なで。その他: 舟形へら削り 白灰色 5%			模様: 良好
25	12	須 志 郡 舟 平 底	高脚鉢 8.5 舟形 14.0 舟高 (12.8)	(内面) 回転なで (外側) 回転なで (内面) 回転なで 灰白色 5%			模様: 良好
26	12	須 志 郡 舟	口径 15.7 舟形 12.9 舟形部 3.6 舟高 (4.8)	(内面) 回転なで (外側) 舟形部: 回転なで。体部: 舟形内に円文 灰白色 5%			模様: 良好
27	12	須 志 郡 舟	口径 20.0 舟形部 15.9 舟高 (4.6) 舟高 (6.6)	(内面) 回転なで (外側) 回転なで。体部: 舟形内えをすり削し 灰白色 5%			模様: 良好
28	12	須 志 郡 舟	口径 24.4 舟形部 19.9 舟高 (9.6)	(内面) 回転なで。底部: 平底したための後、一部が削り (外側) 回転なで。体部: 舟形内えをすり削し 灰白色 5%			模様: 良好
29	13	須 志 郡 舟 上 器	1. 15.7 舟形 6.5 舟高 (5.7)	(内面) 口縁部: 楕円なで。その他: 斜向内へらみがき (外側) 口縁部: 傷なで。体部: 斜向内へらみがき 黑褐色 5%			模様: 良好
30	8	土 師 郡 須 志	口径 13.8 舟形 3.5	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。体部: 楕円なで 灰褐色 5%			裏面に鋸歯。ビット4出土
31	13	土 師 郡 須 志	口径 13.8 舟形 3.1	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで。底部: 不整 灰褐色 5%			
32	13	土 師 郡 須 志	口径 13.5 舟形 3.2	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで。底部: 不整 (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで 灰褐色 5%			
33	13	土 師 郡 須 志	口径 12.8 舟形 3.4	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 不整。舟形: 舟形压痕 明褐色 5%			
34	13	土 師 郡 須 志	口径 13.0 舟形 3.6	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで 灰褐色 5%			外腹面に「舟」とヘアで刻記
35	13	土 師 郡 須 志	口径 15.7 舟形 4.1	(内面) 口縁部: 楕円なで。体部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。体部: 楕円なで 明褐色 5%			
36	13	土 師 郡 須 志	口径 17.0 舟形 4.9	(内面) 口縁部: 楕円なで。体部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。体部: 楕円なで。底部: 不整 明褐色 20%			
37	13	土 師 郡 須 志	口径 12.9 舟形 2.4	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 不整。舟形: 舟形压痕 (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 不整。舟形: 舟形压痕 明褐色 5%			
38	13	土 師 郡 須 志	口径 13.4 舟形 2.8	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで。舟形: 舟形压痕 灰褐色 5%			
39	13	土 師 郡 須 志	口径 15.0 舟形 2.2	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで。舟形: 舟形压痕 灰褐色 5%			
40	13	土 師 郡 須 志	口径 17.4 舟形 1.9	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 不整。舟形: 舟形压痕 灰褐色 5%			
41	13	土 師 郡 須 志	口径 15.2 舟形 2.7	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで。舟形: 舟形压痕 灰褐色 5%			
42	13	土 師 郡 須 志	口径 20.7 舟形 4.5	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 不整。舟形: 舟形压痕 灰褐色 5%			
43	13	土 師 郡 須 志	口径 14.5 舟形 2.3	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで。舟形: 舟形压痕 明褐色 5%			内面: 正直射状態
44	13	土 師 郡 須 志	口径 15.8 舟形 2.8	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで 明褐色 5%			内面: 正直射状態文
45	13	土 師 郡 須 志	口径 19.3 舟形 3.4	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで。舟形: 舟形压痕 灰褐色 5%			内面: 正直射状態文、内腹面: 舟形压痕文
46	13	土 師 郡 須 志	口径 11.0 舟形 3.5	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで 明褐色 5%			内面: 正直射状態文
47	13	土 師 郡 須 志	口径 15.5 舟形 6.3	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで 明褐色 10%			
48	13	土 師 郡 須 志	口径 15.5 舟形 4.1	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで 明褐色 5%			内面: 正直射状態文、内腹面に舟形有り
49	13	土 師 郡 須 志	口径 27.8 舟形 1.5	(内面) 口縁部: 楕円なで。底部: 楕円なで (外側) 口縁部: 楕円なで。底部: 不整 灰褐色 5%			内面: 正直射状態文

表3 NKS97土器観察表（その2）

番号	埋蔵位置	土 種	器 物	器 物 名	法長 (cm)	測 定	參	色 渡	地縫 料合	備 考
50	13	土 種	高 坪	骨盆部	6.2	(内面) 高底部：なく、脚部：枚目。底部：なし。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1 底縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	西沉褐色	10%	脚部は12個	
51	13	上 砂	西 砂	骨盆部	6.2	(内面) 骨盆部：枚目。底部：高底部。脚部：底部、腹側部、腰側部、腹側部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	黄褐色	5%	脚部は10個	
52	13	上 砂	東	骨盆部	5.5	(内面) 骨盆部：枚目。底部：高底部。脚部：底部、腰側部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	浅黃褐色	5%		
53	13	上 砂	東	骨盆部	5.5	(内面) 骨盆部：枚目。底部：高底部。脚部：底部、腰側部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	浅黃褐色	20%		
54	13	土 砂	東	骨盆部	5.5	(内面) 骨盆部：底部。底部：体部；著しいものと薄いものと不明。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	黄褐色	10%		
55	13	上 砂	東	骨盆部	5.5	(内面) 骨盆部：底部。底部：体部；著しいものと薄いものと不明。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	浅黃褐色	5%		
56	13	上 砂	東	骨盆部	5.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明黄褐色	10%		
57	13	土 加 砂	東	骨盆部	5.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	浅褐色	5%		
58	13	土 砂	東	骨盆部	5.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	灰褐色	5%		
59	13	上 砂	東	骨盆部	5.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	褐色	5%		
60	13	土 砂	東	骨盆部	5.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	深褐色	10%		
61	13	土 砂	東	骨盆部	5.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%	外縫に保付番	
62	14	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	赤褐色	10%		
63	14	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	浅褐色	10%	外縫に保付番	
64	14	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%		
65	14	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	浅褐色	10%		
66	14	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	褐色	5%		
67	14	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%		
68	14	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	赤褐色	10%	外縫に保付番	
69	14	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%		
70	14	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	褐色	10%		
71	14	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	赤褐色	10%		
72	14	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%	外縫に保付番	
73	14	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	浅褐色	10%		
74	15	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	褐色	10%	2方向に舌状の把手	
75	15	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%	内面に炭化帯	
76	15	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%		
77	15	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%		
78	15	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%		
79	15	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%		
80	15	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%	甲鉢	
81	15	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%	炭化帯付番	
82	15	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%		
83	15	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	明褐色	10%		
84	15	上 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	黄褐色	10%		
85	15	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	浅黃褐色	5%		
86	15	加 盐 土	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	乳黃褐色	10%	紀洪海城産	
87	15	土 砂	東	口縫部	7.5	(内面) 口縫部：横で。体部：底部。脚部：底部の内側の脚毛目。 外縫：(左) 2.1 右縫：(右) 2.1	浅黃褐色	10%	二次窓底はなし	

表4 NKS97土器観察表（その3）

まとめ

今回の調査は錦織南遺跡の範囲の中でも石川の氾濫原に近い北東部域にあたる低位段丘崖で調査を行った。1986年に大阪府教育委員会が今回の調査区のすぐ西側を走る旧国道170号線で、歩道設置に伴う調査を行っている^(注1)。今回の調査地はその時の調査でP-32～P-34と呼称された設定地点のすぐ東側にあたる。その時の調査の所見では「この間は、段丘面上の谷状地に当たるため、掘削深度が3mを越えても地山面に至らない。耕作土の下に暗茶褐色粘質土、暗茶褐色粘土等の遺物包含層がみられたが、これも先と同様、周辺部からの二次堆積と考えられる。P-33の第5層・暗褐色粘土から土師器の高壙が出土している。遺物包含層の下層には無遺物の砂層、シルト層がみられ、この地区全体が大きな流路であったことを示している。」というように報告されている。当然のことではあるが、今回の調査の結果と整合する。つまり、周辺部からの二次堆積と考えられている耕作土下の暗茶褐色粘質土および暗茶褐色粘土等の遺物包含層は、若干、土色観察で齧歛をきたしているものの、今回の調査区で示した第9層の暗灰褐色土である奈良時代の整地層にあたり、この遺物包含層の下層で検出された無遺物の砂層、シルト層は、今回の調査区でいう河道に該当する。ただ今回の調査区では大阪府教育委員会の調査範囲より広い範囲で調査を行ったからか、奈良時代の整地層をほり込むピット群と奈良時代の整地層下でピット群を検出することができた。これらのピット群は調査区の中でも特に北部域でのみ検出されていて、同じく大阪府の調査で確認されているP-34と呼称された地点より以北で検出されている古墳時代から奈良時代のピット、落ち込み等と関連をもつ可能性が高い。

さらに、今回の調査では、調査区下層全域に検出された河道の最下層の地形を確認するため河道を完掘した。その結果、最深部は約2.5mで大阪層群に達する。河道は当初、強い流れが認められたが、次第に沼化し、早い時期に埋没してしまっていることが想定できる。

以上のことから、今回の調査成果をふりかえってみると、まず、この地区で人の営みが認められるのは、古墳時代後期からである。大阪府教育委員会の調査で、この時期のピットがどの程度確認されているのか詳細が不明であるため集落等についてはわからないが、今回の調査で埴輪の出土が認められることから、この周辺に埋没古墳のあったことも推測できる。また、従来から、奈良時代の錦織南遺跡については1986年の錦織小学校の体育館建て替え工事に伴う富田林市教育委員会の調査と1984年の大阪府教育委員会の調査^(注2)で中位段丘上に集落が築かれていることがわかっていたが、今回の調査で奈良時代も中葉以降から平安時代にかけての時期には、石川の氾濫原に近い低位段丘崖にまで開発の規模をひろげ、集落を築いていることが確認できた。集落の規模等については、今後の調査に期するほかはないが、この時期の大きな造成がこの地区にとってどういう歴史的意義をもつのかは改めて考えてみる必要がある。

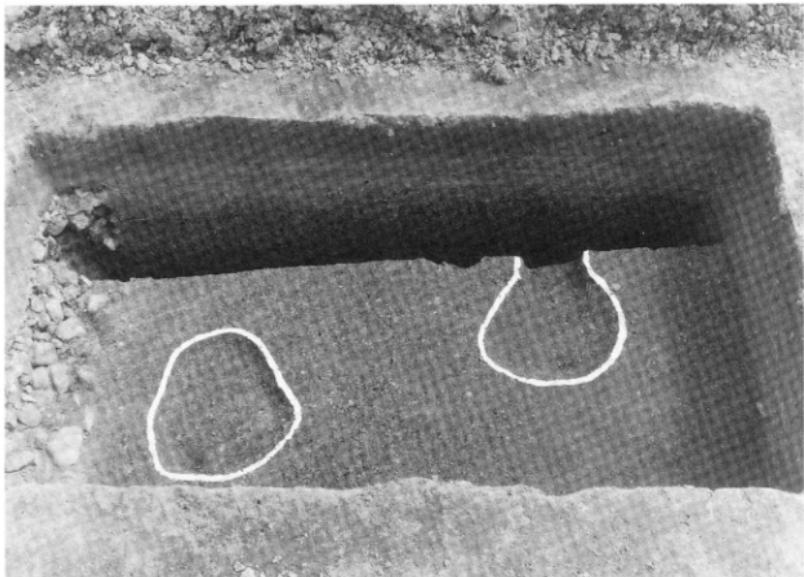
(注1) 小林義孝 (1986) 「錦織遺跡発掘調査概要－富田林市錦織所在－」 大阪府教育委員会

(注2) 館 邦典 (1984) 「錦織南遺跡発掘調査概要」

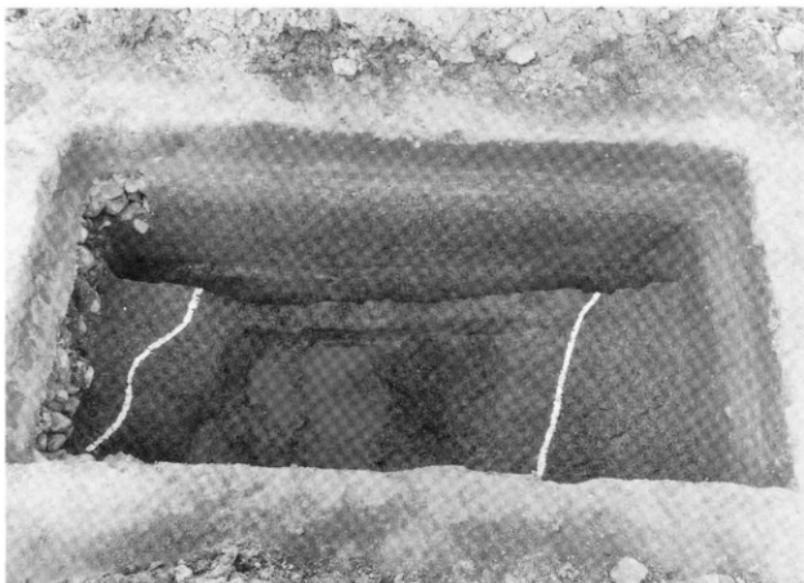
報告書抄録

ふりがな	へいせい 9ねんび とんだばやしないいせきぐんはつくつちょうさほうこしょ						
書名	平成9年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書						
副書名	富田林市埋文化財調査報告29						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著書名	栗田薰・平方扶左子・田中正利						
編集機関	富田林市教育委員会						
所在地	大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎0721-25-1000						
発行年月日	西暦 1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○.′″	東經 ○.′″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
にしこおり ひさき 錦織 遺跡	新潟さかみとんだばやし 大阪府富田林市 おおたにじょう	2714		34° 28' 56" 135° 35' 25"	1997.7.24 1997.7.3	10.0	個人住宅建設
にしこおり ひさき 錦織 遺跡	新潟さかみとんだばやし 大阪府富田林市 おおたにじょう	2714		34° 29' 8" 135° 35' 39"	1997.10.6 1997.10.7	4.0	個人住宅建設
にしこおりみなんい ひさき 錦織南遺跡	新潟さかみとんだばやし 大阪府富田林市 おおたにじょう	2714		34° 28' 28" 135° 35' 16"	1998.1.6 1998.1.31	350.0	特別養護老人ホーム建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
錦織遺跡	その他	奈良時代～中世	溝・土坑・ピット	土師器・須恵器・瓦器			
錦織遺跡	その他	室町時代	土坑	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器			
錦織南遺跡	その他	奈良時代 平安時代	河道・ピット	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器			

図 版



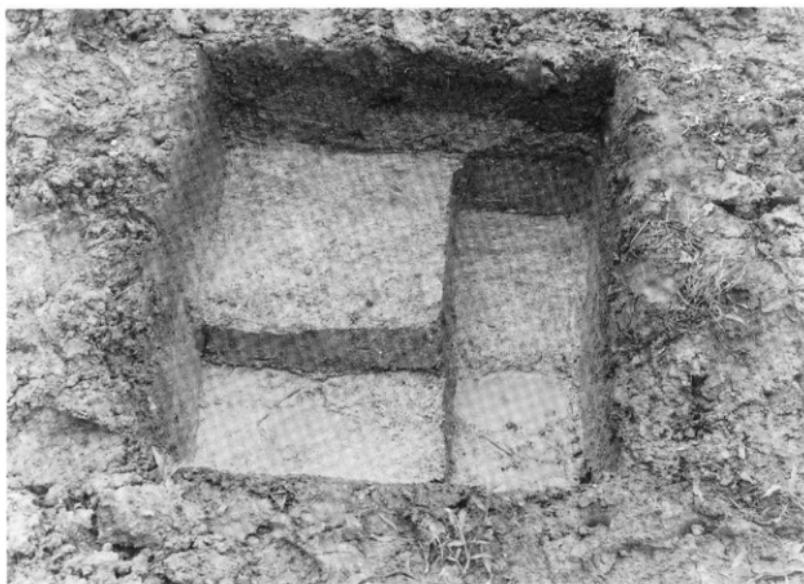
NK97 第1トレンチ上層全景（南西から）



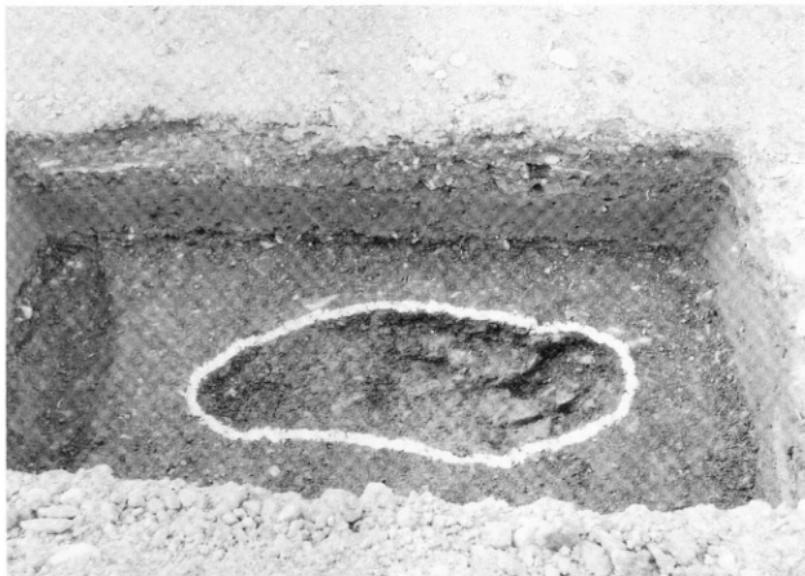
NK97 第1トレンチ下層全景（南西から）



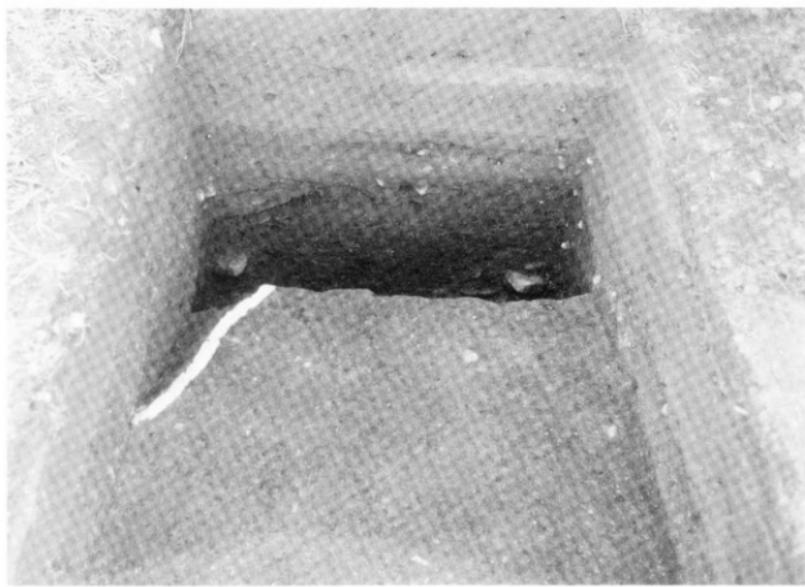
NK97 第2トレンチ全景（南から）



NK97 第3トレンチ全景（東から）



NK97-1 第1トレンチ（東から）



NK97-1 第2トレンチ（北から）



NKS97 全景（北から）



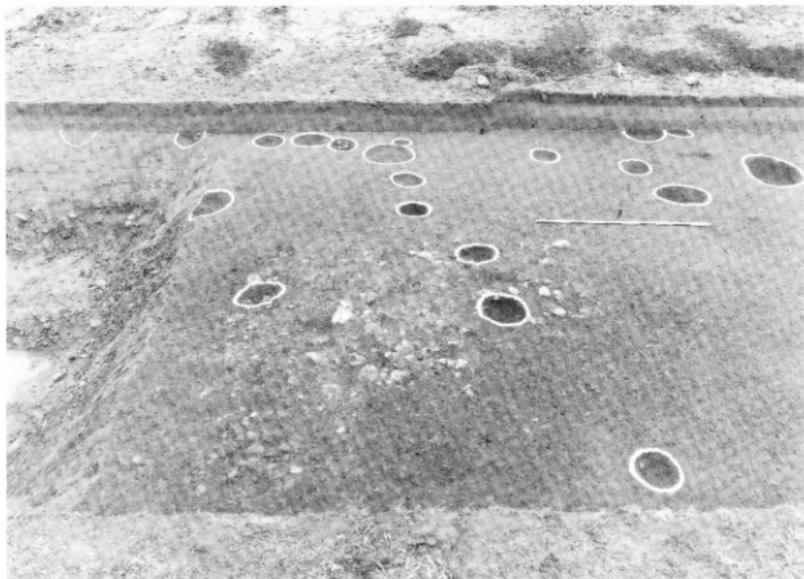
NKS97 全景（南から）



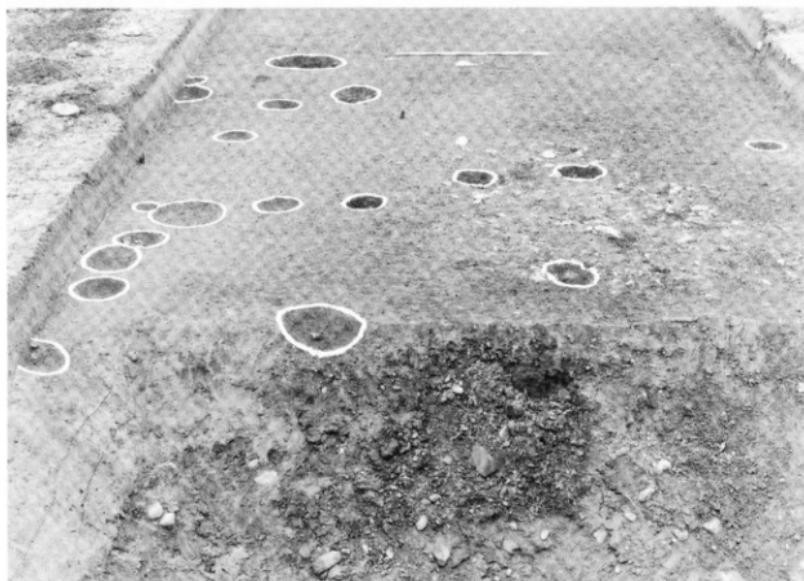
NKS97 南側断面（北西から）



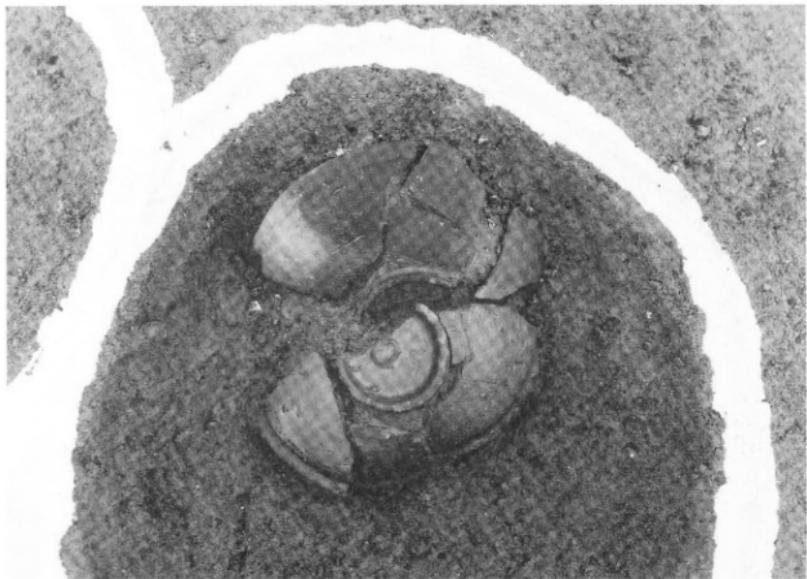
NKS97 東側断面（北西から）



NKS97 上層遺構全景（西から）



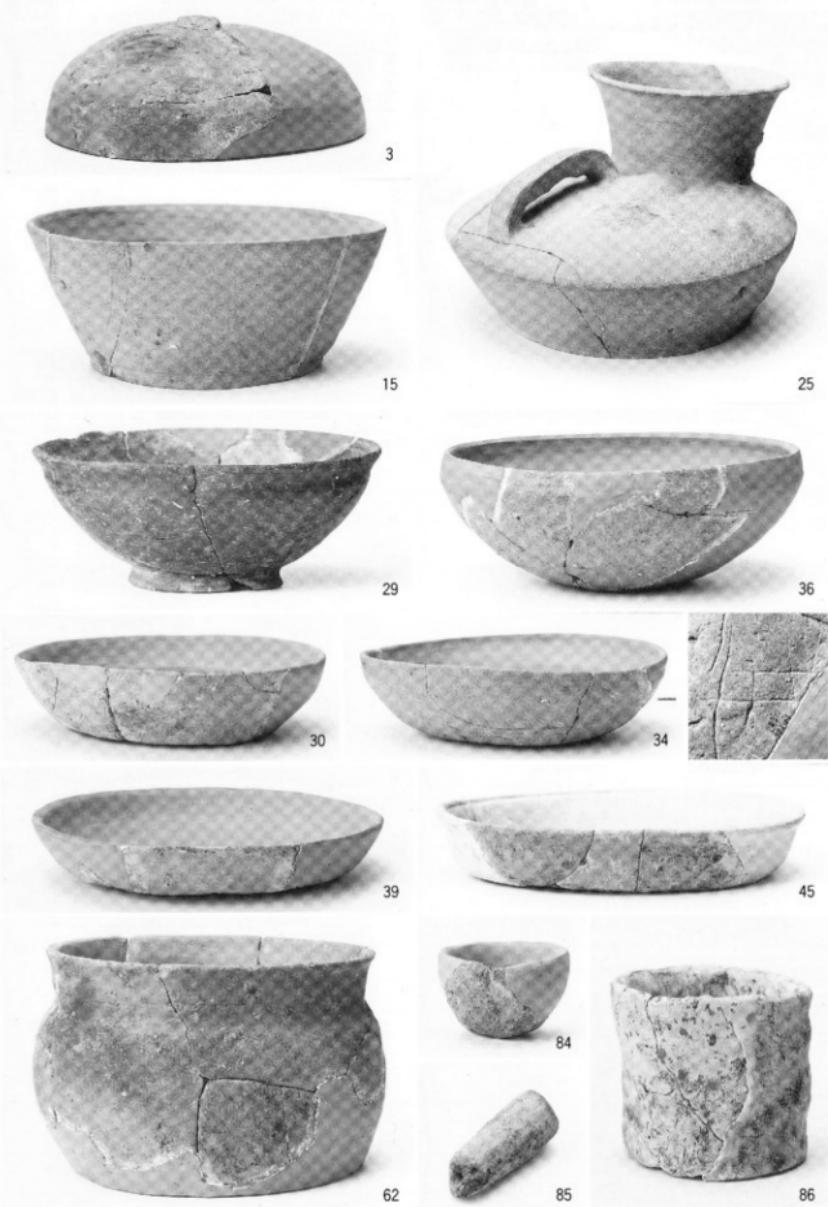
NKS97 上層遺構全景（北から）



NKS97 ピット4（西から）



NKS97 西側断面 第9層遺物出土状況（東から）



富田林市埋蔵文化財調査報告29

発行年月日 1998年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

1998. 300

